

- 27:27 十四日目の夜になり、私たちはアドリア海を漂っていた。真夜中ごろ、水夫たちはどこかの陸地に近づいているのではないかと思った。
- 27:28 彼らが水の深さを測ってみると、二十オルギヤであることが分かった。少し進んでもう一度測ると、十五オルギヤであった。
- 27:29 どこかで暗礁に乗り上げるのではないかと恐れて、人々は船尾から錨を四つ投げ降ろし、夜が明けるのを待ちわびた。
- 27:30 ところが、水夫たちが船から逃げ出そうとして、船首から錨を降ろすように見せかけ、小舟を海に降ろしていたので、
- 27:31 パウロは百人隊長や兵士たちに、「あの人たちが船にとどまっていなければ、あなたがたは助かりません」と言った。
- 27:32 そこで兵士たちは小舟の綱を切って、それが流れるままにした。
- 27:33 夜が明けかけたころ、パウロは一同に食事をするように勧めて、こう言った。「今日で十四日、あなたがたはひたすら待ち続け、何も口に入れず、食べることなく過ごしてきました。
- 27:34 ですから、食事をするよう勧めます。これで、あなたがたは助かります。頭から髪の毛一本失われることはあります。」
- 27:35 こう言って、彼はパンを取り、一同の前で神に感謝の祈りをささげてから、それを裂いて食べ始めた。
- 27:36 それで皆も元気づけられ、食事をした。
- 27:37 船にいた私たちは、合わせて二百七十六人であった。
- 27:38 十分に食べた後、人々は麦を海に投げ捨てて、船を軽くした。

<説教>

使徒パウロは〈親衛隊のユリウスという百人隊長〉(1)に率いられて〈イタリアへ行くアレクサンドリアの船〉(6)で地中海を航行していました。〈数人の囚人〉(27:1)、またルカや〈アリストルコ〉(2)らキリスト者仲間、そして〈船長や船主〉(11)、水夫たち(27)、〈兵士たち〉(31)たちが同じ船に乗っていました。船は〈積荷〉(18)や〈麦〉(38)を積んでいたということなので、商人たち等もいたことでしょう。船にいた人数は〈合わせて二百七十六人〉(37)でした。

パウロがイタリアに向かっていたのは、ローマで皇帝・カエサルの法廷に立つためでした。もともとはエルサレムで、反対するユダヤ人たちが、ローマから派遣されていたユダヤの総督にパウロを告訴したのでした。それでパウロは「私はカエサルの法廷に立っているのですから、…カエサルに上訴します」と言った(25:10-11)ので、総督は「おまえはカエサルに上訴したのだから、カエサルのもとに行くことになる。」と言い(25:12)、こうしてパウロはローマに送られることになりました。

しかしけれは知っていました。自分がローマに行くのは主イエス・キリストのご計画、御意思(みこころ)によるのだということを。「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことを証したように、ローマでも証しをしなければならない」との主のみこ

とばをパウロは聞いていました(23:11)。この主イエス・キリストにパウロは全く信頼し、依り頼んでいましたから何の心配も無くローマへの旅を続けることができました。

その途中、季節的に今これ以上航海を続けることは「積荷や船体だけでなく、私たちのいのちにも危害と大きな損失をもたらすでしょう」と言うパウロの警告(27:9-10)を百人隊長、船長、船主ほか多くの人が聞かずにクレタ島の「良い港」を出て〈クレタの海岸に沿って航行〉(27:13)しているときに〈ユーラクロンという暴風が陸から吹き降ろして来〉ました(14)。〈船はそれに巻き込まれて、…流されるままとなった〉のです(15)。〈暴風に激しく翻弄され…太陽も星も見えない日が何日も続き、暴風が激しく吹き荒れたので、私たちが助かる望みも今や完全に絶たれようとしている〉た(18-20)とルカは記します。

しかしパウロは絶望しませんでした。彼はまるで自分が船長や百人隊長でもあるかのように人々の〈中（央）に立って〉(21)、「元気を出しなさい。あなたがたのうち、いのちを失う人は一人もいません。失われるのは船だけです。」と言いました(22)。何故ならば、主なる神さまが御使いを遣わして「恐れることはありません、パウロよ。あなたは必ずカエサルの前に立ちます。見なさい。神は同船している人たちを、みなあなたに与えておられます。」とみことばを語ってくださったからです(23-24)。「ですから、皆さん、元気を出しなさい。私は神を信じています。私に語られたことは、そのとおりになるのです。27:26 私たちは必ず、どこかの島に打ち上げられます。」とパウロは証しました(25-26)。

これまで読んで来た箇所、そして今回以降、パウロが乗った船の航海の様子をルカが長々と記したのは、パウロにお語りになった主なる神の約束のみことばがそのとおりに、続けて主がお考えになり、主がなさろうとする仕方によって実現して行ったということです。パウロが信じる神、主イエス・キリストを信じることができずに怖れおののき、いのち惜しさに自分の責任を放棄して、自分だけ助かろうという人々や、やはり怖れおののき、あわてて失敗してしまう、そんな人々が大多数の中で、一人落ち着いて神に信頼して聞き従い、主から与えられた務めを忠実に果たして、自分に「与えられている」(24)人々に仕えようとするパウロが用いられて主のみことばが実現して行ったということです。

今言いました「パウロが信じる神、主イエス・キリストを信じることができずに怖れおののき、いのち惜しさに自分の責任を放棄して、自分だけ助かろうという人々や、やはり怖れおののき、あわてて失敗してしまう、そんな自己中心で愚かな人々」のことが27～32節に書かれています。〈アドリア海〉(27)はクレタ島の西、ですから地中海の西側の部分、マルタ島(28:1)に接する海、イタリアの南東から南の海です。〈水夫たち〉(30)は船の帆を操作したり、船を漕いだりする人たちでしょう。暗礁に乗り上げないように上手く船を操縦するのが彼らの職責なのに彼らはそれを放棄して、船が暗礁に乗り上げることを怖れてその前に、〈真夜中ごろ〉暗闇に紛れて自分たちだけが助かろうとしたのでした(30)。まさに「闇のわざ」と言うべきものでした。しかしパウロが指摘したように彼らがいなくなってしまえば今後誰も船を動かすことができず、誰も助かりません(31)。それを聞いた兵士たちは「それは大変だ」と慌てたのでしょうか。〈小舟の綱を切って、それが流れるままにし〉てしまいました(32)。それで水夫たちが逃げ出すのを防ぐことはできましたが、同時に今後も必要なはずの小舟を失ってしまう失態を演じてしまいました。

一方パウロはどうだったでしょうか。彼はもちろん、神を信じ、主イエスを信じていました。主が自分に語られたことはすべて必ずそのとおりになると信じ、人の前で告白して

いました(25)。では自分ではなにもしないでいたのかと言えばそうではありません。主のみことばを受けたパウロこそが、一緒に船に乗っていた人々が助かるためにどうするべきか考え行動しました。それで、水夫たちが逃げ出そうとしたのを真夜中でも見逃さず、百人隊長や兵士たちに言って、それを阻止しました(31)。そして〈夜が明けかけたころ、一同に食事をするように勧め…パンを取り、一同の前で神に感謝の祈りをささげてから、それを裂いて食べ始め〉ました(33-35)。それまで十四日間も暴風が止むのを待ち続け、どこかの島、陸地に近づくのを待ち続け、疲労と絶望で食べる気力までも失い、元気と体力も失っていた皆が〈元気づけられ、食事をした〉(36)のです。こうして〈十分に食べ〉て元気と体力を得た人々は陸地への上陸に備えて〈麦を海に投げ捨てて、船を軽くし〉ました(38)。こうして「頭から髪の毛一本失われることなく、あなたがたは助かる」、それは「私が信じてあなたがたの前で食前の感謝の祈りを捧げる神が、世の光なる主イエス・キリストが暗闇からあなたがたを救い出してくださるのだ」とパウロは皆に証ししたのです。

このパウロが〈パンを取り、一同の前で神に感謝の祈りをささげてから、それを裂い〉た様子、人々が〈十分食べた〉様子から、「五千人の給食」「四千人の給食」のときの主イエスの姿が思い起こされます。また、十字架の死の前夜の晩餐での主イエスの姿も思い起こされます。そうです、私たちには明かです。パウロは〈いのちのパン…天から下って来た生けるパン〉(ヨハネ 6:48-51)としてご自身を与えてくださった主イエス・キリストを人々に差し示したのです。更には「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばで生きる」(マタイ 4:4。申命記 8:3)ということも差し示したのです。

今日この後、私たちは聖晚餐において主イエスの御からだと御血に与ります。今の罪の世、暗闇の世にあって、「生ける神のみことば」「真の生けるいのちのパン」「世の光」なる主イエス・キリストをことばと行いによって証しし、神の善き御意思(みこころ)の実現のために用いていただく私たちであるように願い、主イエスの御名によって祈ります。